

chapter2 そこに 壁があるから

052

クッキーなまこ

(鳥取県東伯郡琴浦町)

戦略をめぐらし世間の反応を推し量って生み出されたモノなど、アートとは呼びたくない。何ら表現の欲求もないのに器用にひねり出されるモノが人を魅了できるはずがない。人を感動させるのは、止むに止まれぬ因業な表現のありかたに対してではないのだろうか。息を殺して塗り上げた職人の得意に敬意を表し、このなまこ壁を「クッキーなまこ」と命名する。





053 鞘の壁
(愛知県常滑市)

千年の歴史を持つ常滑。中部国際空港に降りるときに見える、浅い海底の泥、泥、泥。河から贈与された泥を焼き続けた常滑は、世間遺産で溢れている。サイコロカットのこの壁は、鞘とかトチンと呼ばれる窯場の必需品で、窯詰めの際の土台に使う道具。つまり土管の黒子というわけ。窯場の余剰から生まれたもったいないスピリット。あるもので間に合わせたブリコラージュの一級品。



054 左官ギヤルドなまこ
(熊本県阿蘇郡小国町)

キッチンでグロッタなまこ壁。なまこは左官棟梁の腕の見せどころというが、そこには親方ひとりの身体に脈々と受け継がれてきた技術史、そして生活史も潜んでいる。有明の白い貝殻と黒い石炭の婚姻から生まれる無尽蔵の壁物語を追跡していたら、足元の凝灰岩を使い切り出し穴に漆喰を詰め込んだ、初源のようなこの壁に出会い、悦ばしき佇まいにひとときの沈思を得る。



門付け万歳は年の始めを祝う芸能。
平安時代から宮中または幕府、寺社
等の権門の庭で行なわれ、民間一般
に及んだというのが通説。烏帽子を
かぶり、才蔵がだじゃれ、それを太夫
がたしなめる。三河万歳は特に有名。
そういえば広島は、「もみじ鰻頭！」
のコンピの出たところだったなあ。



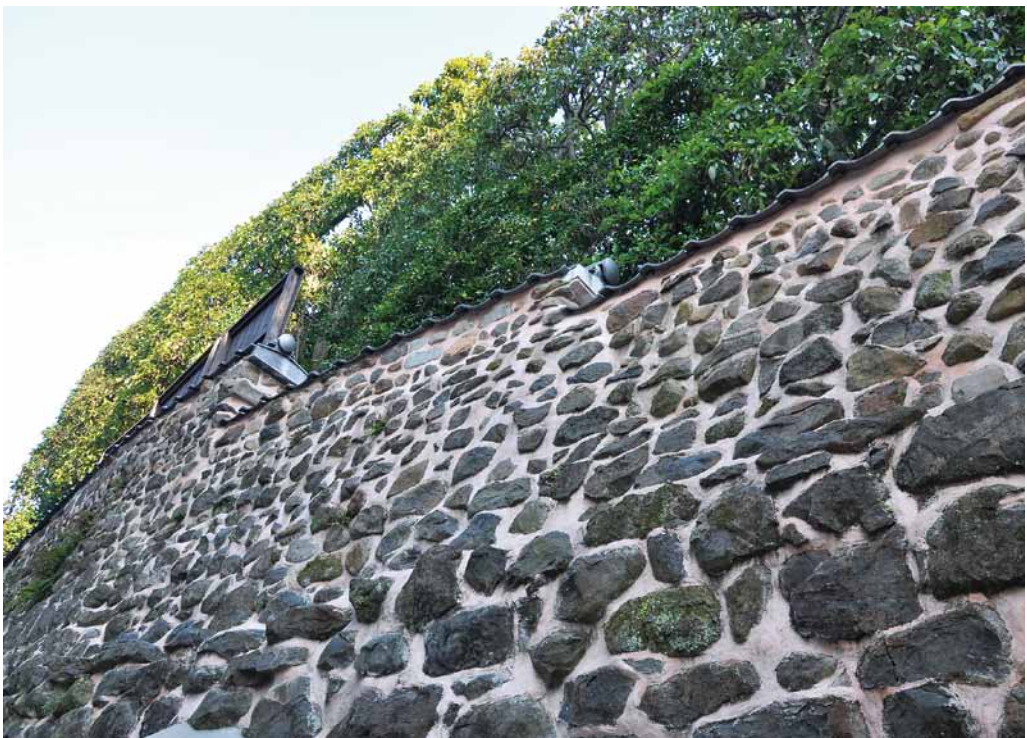
056 ブタ甕の壁 がめ (愛知県常滑市)

ふぐ提灯かブタの蚊取り線香のようにも見える甕の壁。世界で最も有名な壁は、アラブとイスラエルが血なまぐさい争いを続ける聖地エルサレムの「嘆きの壁」だろうが、クスツと笑えるこの壁のほうは何倍も平和だ。この壁は後で登場する「ドカンハウス」の近くにあって、後ろのマンションからもわかるように開発の手がそこまで伸びている。本物を御覧になりたい方はお急ぎください。



057 応急処置の壁★ (天分県豊後高田市)

壁の両側に板を添えて上から泥土を搗き固める技法を「版築」という。日本人が心を泥ませる土壁や三和土といった自然素材で構成されたこの牛小屋の壁は、美しく崩れるワビサビの世界。壁に空いた大きな穴も足元の石を詰めればハイ、修理完了。雅びで荒びな絶滅危惧種だ。



058

コンニャク煉瓦^{れんが}の壁 (長崎県長崎市)

たぐさんの煉瓦を見てきたが、維新前後の一時期に長崎で焼成されたコンニャク煉瓦は地域限定の希少種。この時代はまだ焼成温度を高熱にできなかったので薄型、そこで「コンニャク煉瓦」、または技術指導をしたオランダ人の名をとって「ハルデス煉瓦」とも呼ばれている。長崎ではグラバー邸ほか数ヶ所で見られるのみ。これで我が輩の「煉瓦^{レンダ}曼茶羅」も完成間近でアル。

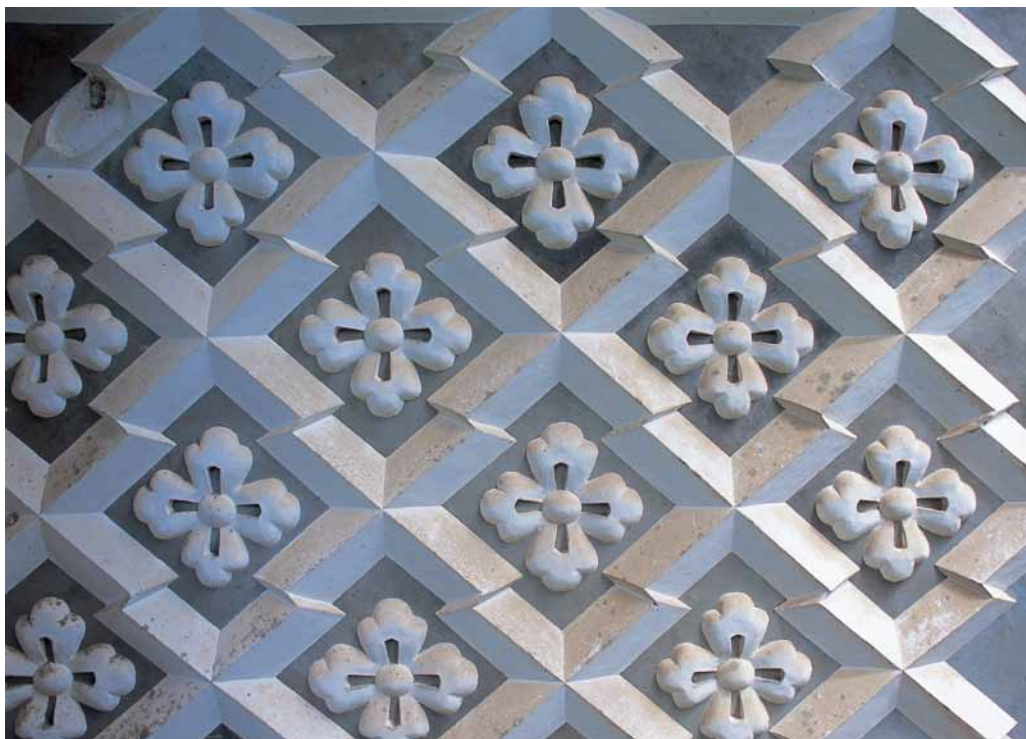
059 ベンガラの練堀^{ねりべい} (長崎県長崎市)

さる時、長崎の丸山をさるいで出会った料亭のパステル・ピンクのベンガラ(紅殻)の壁。長崎・丸山は江戸の吉原、京の島原とともに天下の三大遊郭として栄えたところで、延宝版の『日本永代蔵』で井原西鶴が「長崎に丸山というところなくば、上方の金銀、無事に帰宅すべし」と記されているほど。ちなみにここ料亭「花月」(引田屋)は寛永19年(1642)に誕生。その物語だけでも充分に楽しめる逸品。

060 花菱なまこ壁

(鳥取県鳥取市)

岩手、石川、富山から瀬戸内を経由する大阪、そして山陰の各地にいたるまで、さまざまの港でさまざまななまこ壁を見てきたが、ここのなまこ壁はうっとりするような花菱紋様。ちなみに菱は河川や池や沼に繁茂する植物で、水に関わりの深いところから、火伏の意匠として暮らしの中に溶け込んでいる。四半と菱のコラボが秀逸。



061 方位磁針の壁

(兵庫県淡路市)

この紋様はいったい何だ。そもそも何と呼べばいいのか。たまたま近くの喫茶店に並んでいた「紋切り型」なるタイトルの小冊子に似たような模様が紹介されているのを見つけたのだが、詳しい名前までは分らず。この壁の発する強力な磁場に引き寄せられるようにして撮影した一枚。



062 日本兵の壁
(愛媛県今治市〈小太下島〉)

以前から気になっていたのが、「怪しい」と「妖しい」は一体どこが違うのだろう。民家の壁に残る「万歳・大勝利」のレリーフや「鬼畜米英」の墨書など、あちこちで戦争遺産の墨絵を見てきたが、こんなに血眼の兵隊さんは初めて。いつまでも平和でありますよう。





063 ご祝儀の壁 しゅうぎ

(大分県玖珠郡九重町)

「町おこし」の時代が終わり、わが国もついに新旧の価値観を逆転させねばならない時代を迎えつつあるように思えるが、写真はかつて全盛だったストリップショーの時代が終ろうとしていた頃、代りになる出し物ということで考案された地元温泉郷の質朴な素人芝居。あのときの役者は村の若者だったが、30年を経たいま、白髪の目立つおじさん。



064 真珠の壁

(長崎県西海市西彼町)

ここ田崎家の「供養庵」の壁には真珠が埋め込まれた16頭の馬が踊っている。日本で産出する唯一の宝石である柘榴石（ガーネット）の壁や紅珊瑚、鹿児島で博多帯をほぐした塗り壁を見て、面白いものがあるものだ、そのうちダイヤや小判の壁なんでものが浮上するかもと思っていたら、この壁が出現したという次第で、未だ興奮が冷めません。